

(財) 全国強制抑留者協会事務局長

(埼玉県 饗庭 秀男)

流転の兵役と抑留

東京都 岩 本 行 夫

人事係加藤曹長より話があるというので、夕食後、

中隊事務室に私たちは集合した。話は、下士官候補に進むようにおだて脅かし説教をされた。同期の大久保君は、入隊時に下士官候補を希望したのに落とされたのだ、残留して今度は下士官になれとは何だと憤慨していた。私たち残留者は全員下士官候補になるように、曹長は説明ではなく脅かした。自動車手から池本、北村二人が下士官候補に進んだ。池本は、班長が話をしたのでその気持ちでいたらしい。北村は、岐阜自動車学校に行っていたのでいやおうなしに下士官候補にされた。二人は一選抜の上等兵になり、私たち同期兵もその後上等兵に進級した。曹長は私たちに度々きつ

いことを言っていたが、私は兄が面会に来た時の言葉が気になって、他の同期兵と共に断り通した。

同期兵の自動車手 大久保、永田、金子、太田、私

〃 下士候 池本、北村

補充兵と転科兵の自動車教育では、補充兵は体格が貧弱で軍隊生活に耐えられるのかと可哀相に思った。

各教育を三カ月終わると各部隊に転属していくので毎日多忙だった。

自動車操縦教育はガソリンが制限され、兵隊の使用量はわずかだ。器材班の製作した模造の操縦台に乗り、私たちの号令でハンドル(転把)、クラッチ(連動器)、アクセル(速度板)、ブレーキ(停止板)を動作した操縦教育で、自動車を全然知らぬ兵隊であった。

構造の説明は車両実地で教育、講義するのは技術者の古参兵で、私たちも良い勉強になった。私たちが初年兵の頃は操縦が主で、構造は教科書と航空兵操典を読みだけだった(私は小型免許証を持っていた)。冷たい車庫内で講義を聞くので兵隊の中には居眠りする

者がおり、手旗で叩き起こしてやるとびっくりしてまわりを見てきよんとしていた。

飛行場端の爆撃場での補充兵の軍事訓練で、古参の転科兵と私は仮想敵となつて爆弾の跡坑より此方彼方と手旗を振り走り回つた。いも畑に入つていもを食べながら駆け回つた。梨畑の垣根の下から潜り、梨を取つて雑糞に入れてきた。爆撃場を走り爆弾跡の坑に入つてうたた寝し、青空を眺め次の行動作戦を話し合ふ。九七重爆機が旋回して来た。重爆機が来るとは変だと思つていると爆弾を落として来た。古参兵と私はびっくりして逃げた。兵隊は「○○方向飛行機発見、距離○○」と言つて小銃を向けていた。

三方原飛行場と爆撃場は各中隊の訓練場であつた。

戦隊と浜校（飛行学校）が爆撃場を使用する時は部隊に通報するようになった。模擬爆弾でも危険だからだ。

部隊の米飯に麦、大根、いも、豆が入つた。梨畑は現在でもあるそうだ。

昭和十七年五月、九七部隊長眞館大佐がバンコック

第四航空路に転任。部隊長車当番勤務の自動車手は将校集会所に呼ばれて会食した。金一封をいただいた。

昭和十七年七月、酒匂中隊長より岐阜各務原飛行団指令部に派遣命ぜられる。部隊の榮譽をになつて私は自動車手として派遣勤務に三カ月服した。飛行団司令部にて永田と交代、私は申し送りを受けた。

団長神谷少佐 衛外将校十人 衛内下士官三人
各部隊より派遣兵五人 自動車手二人 暗号手一人
無線手一人 一般兵一人 賄員（通勤の地方人）一人

車両 乗用車 日産木炭車（ガソリン切り替え可）

〃 〃 カーバイド車

貨車代燃車 トヨタ薪自動車

計 三台

派遣兵は飛行団内の部に勤務に就いた。自動車手は岐阜市内の団長宅より送迎を一週間交代勤務。無線室と暗号室には各戦隊の情況（飛行機事故）と南方の戦況等の情報が入る。隣はブロック塀が境で憲兵隊だつた。くぐり戸から下士官が飛行団に地方に電話をか

けるために出入りしていた。

飛行団の裏はブロック塀の境で兵器廠と飛行場だ。

格納庫内にアメリカのB17機が駐機、日本の九七重爆機の倍の大きい飛行機だった。今日も重爆、戦闘機が多数各基地に輸送するため飛んで行く。爆音を心強く思った。テストパイロットの准尉が操縦するメッサーシュミット機の金属爆音がキンキンと独特だった。急降下、背面飛行で格納庫屋根の間をすれすれに飛行した。班長と私は倉庫の屋根の上ではらはらして見ている。以前に長良川、木曾川の橋の下を飛行して団長に止められたと班長が話をした。団内の敬礼は朝と夕に決められる。日中は目礼でよいことになった。

車庫で私が車両の手入れをしている時酒匂中隊長が来られた。停止敬礼か目礼でよいのか戸惑っている。と、隊長が目礼されたのでびっくりした。目礼すると隊長は「元気で勤務何よりだ、ご苦労」と言われた。私は胸の動悸がやっとおさまった。飛行団にいつ各中隊長が来られたのか、誰も気付かなかった。班長が団内の勤務事情の話をしてあったのだろう。

幹部将校を五人、新自動車に乗せて私は芋掘りに美濃太田に向かった。暗号手が美濃太田の出身で案内役だったので、道路を知らぬ私は気楽だった。飛行団内では気難しい将校も芋畑に入って子供のようにはしゃいで芋を掘り、楽しい一日で天気もよく、飛行機の爆音も聞かず、爽やかな野の空気を十分に吸った。帰りに釜の中に芋を入れた。飛行団に帰り、釜の中の芋は薪と同じく真っ黒に焼けて失敗だった。針金で吊るして壺焼きにすればよかった。後の祭りであった。

当分の間、朝のみそ汁も芋入り、米飯も芋入りの食事。賄員は昼と夕は献立表以外の料理を出す。糧秣を気にしないので班長から時々注意されていたが……。風呂は鉄釜の五右衛門風呂。浮いている箸の子に上手に乗らぬと入れなかった。釜の周りには熱かった。風の強い時は煙突から風が入ってきて煤で顔が黒くなり、大笑いだった。

外出は二人で行動を共にした。公用証なので営住外にも行けた。名鉄線は車両は赤い色の電車。初めての外出は岐阜市内に行った。柳ヶ瀬の繁華街は下士官、

兵隊が多数いた。敬礼が大変だった。私は長良川大橋（営住地内はここまで）を渡って金華山（城）に行く。と営住地外への外出の兵隊は一人もいなかった。食事をしたがら長良川を見物して、大橋を渡った繁華街はト士官ばかりで兵隊は帰隊の時間（夕食時まで）だった。私たちが十九時半頃名鉄線岐阜駅から乗り、憲兵にとがめられ飛行団の公用証を見せた。飛行団の公用証を見て憲兵は何も言わなかった。私たちは点呼までに帰ればよいので下士官待遇だった。

別の日、外出は岐阜市街でなく名鉄線に乗って犬山に行った。犬山城を見物、木曾川の川原で遊んでいると、町の人（軍属）が写真を写してくれた。飛行団の兵隊だと言うと、飛行団は知っているからと現像して届けてくれた。

師団長機の操縦士准尉は酒好きで有名な人だった。飛行団に時々強請に来るので班長はよく知っていた。賄員に倉庫から持って来させた酒一升瓶を班長が准尉に渡すと、何日の何時に飛行機を試運転する、兵隊を乗せてやるから格納庫に来いと言う。その日班長が私

に行くように言うので格納庫に行くと、高等練習機の前で准尉が待っていた。「お前一人か。後部席に乗って締めろ。バンドだぞ」。私は練習機に乗って半信半疑でいると整備兵が笑っている。整備兵がプロペラを回してエンジンをつけた。点火の声は聞こえなかった。滑走路に出て離陸体勢に入って離陸。私の体にか付いているように後ろに引く張られた。ここまではどうということがなかったが、急上昇して血が頭に上り、胸が圧迫された。飛行機が横飛行になってやれやれと思ったとたん、急降下を始めた。「やめてくれ」と叫んだ。何だか逆立ちをして地面に突っ込んでいる感じだ。何も見ることもできず、目が回っている。練習機は何時着陸したのか、私の体は空中に浮いている。飛行機に乗って空から見物できると思ったが、大間違い。離陸するときに整備兵が笑っていたわけを知った。

准尉曰く、空に障害物が無い飛行機の操縦は、離陸すれば自動車の操縦より簡単だと……。飛行団勤務生活は多々の珍事があり、思い出は書き切れぬ。

飛行団司令部派遣勤務三カ月間を振り返ると、半官半民の軍隊でない軍隊生活を体験したのだった。

昭和十七年十月、岐阜飛行団司令部派遣勤務終了、浜松中部九七部隊二中隊（酒匂隊）に帰隊した。

酒匂中隊長に申告に行く、「岐阜飛行団勤務、無事終了ご苦労であった」と言われた。皆勤賞を受領した。

部隊内は召集兵、転科兵が兵舎に、下士官、兵隊が講堂、食堂に多数いた。その中には、後に戦友会で知ったことだが、パレンパンに降下した落下傘中隊がいた。私が中隊事務室にいと顔の知らぬ伍長が迎えに来た。村瀬班長（転科兵）で、階上の内務班に連れて行かれたが、内務班では知らぬ兵隊ばかりだった。班長が岐阜飛行団に派遣勤務していた私を今日から班付と紹介。体格は小柄の兵隊たちだった。明日から訓練教育しなければならぬ。

浜松と岐阜の軍隊生活を二カ年過ごしたが、昭和十七年十二月、私は転属することになった。各中隊からも転属兵は一泊二日の外泊許可が出て親の所に帰る。

私も浜松駅から東海道本線の列車に乗り、東京市芝区巴町にいる母のところと武蔵小山の姉のところに行った。義兄は召集されていた。兄も、浜松部隊の私に面会に来て話をしていて通り召集され、どこの部隊にいるのか、二人の兄の所在はわからなかった。戦時下の情景が異観だった。

時間の過ぎるのは早く、一泊二日の外泊は短く感じた。

昭和十七年十二月末日、浜松第一一三戦隊に転属。今までは南方に南方にと将兵は行っていたので、南方ばかりに目が行く。各部隊から将兵が戦隊に集合して多数の人員になってきた。私たちはどうも変な気持ちが出ていなかった。

質車（トラック）が大きな梱包箱を搬入して来た。被服班の下士官が来て私たちに被服庫に運び員数を点検するから梱包を開いてくれという。中は防寒服だった。誰が着用するのか暖かそうだ。私たちが着用するとは誰も思っていなかった。北方のどこかに輸送機で運ぶのだから。飛行場に重爆機が十数機駐機し整列し

ていた。私たちも輸送機か重爆機で出発だと思っていた。

昭和十八年一月、将兵は軍装して貨車に乗車。飛行機ではなかった。戦隊の止門を通り姫街道を走り、高射砲部隊、陸軍病院を後にして浜松市内の数々のことを思い出して浜松駅に着いた。九七部隊戦隊、飛行場、さらば……さようなら……。隠密行動なのか見送りの将兵の姿は無し。駅で町の人が見ている。憲兵がどこかで監視しているだろう。

ホームでは鉄道隊員が車両の点検で走り回っていた。鎧戸を下ろし薄暗い軍用列車に乗車、鎧戸の隙間から陽が差すので日が慣れてきた。小声で人員点呼、異状なし。大分時間がかかり、やっと浜松駅を後に発車した。

暫くしてから青森県八戸戦隊に行く伝達があった。何日の何時に着くか、鉄道隊員もわからぬ。走っては止まりの列車、駅もないところに停車、全員下車、廁（トイレ）、体操をした。草の上のうたた寝、それまで座席にいたので足を伸び伸ばさせた。乗車の際に点呼

確認は軍隊のきまり。異状なし、列車発車。私は鎧戸の隙間から海や山を眺め、浜松、岐阜を思い出していた。列車の騒音が大きくなって、車内の照明が明るくなる。トンネルに入ったのだ。誰ともなく軍歌を歌う。大声の軍歌になって列車の騒音が聞こえないほどだった。列車内のトイレは兵隊の列であった。これも連鎖反応かと思った。誰かが「しょうがない、窓珍出してするか」というので大笑いだった。

横浜に近くなつたと誰かが言い出した。横浜で止まるかと思っていたが、列車はスローで過ぎて行く。次は東京で止まるのだ、賭けてもいいぞと言う兵隊がいた。東京も間近くなつたようだ。川崎辺りか、工場のサイレンが聞こえた。列車は品川駅に停車した。私は鎧戸の隙間からホームを見る。鉄道隊員が走って行動していた。車両の人員を確認して経木に包んだ物が入った箱をデッキに置いていく。にぎり飯だった。沢庵の匂いがした。

憲兵がホームを見て回り列車を監視している。私は出入口の近くにいたのでデッキに行くと、ホームの柱

のところでは情報漏れのないように厳しく言った将校が家族と面会をしているのを見てしまい、何だか悪いような気持ちになった。

軍用列車はスローで走り始め、代々木より中央線に入る。四谷、市ヶ谷の濠端を鑑戸から私は飽きもせず眺めていた。飯田橋駅をスローで通過して、上野で引込線に入り停車をした。列車は行ったり来たりする。入れ替え作業をしているようだった。私たちは食べては寝る。よく寝られた。何もすることがない。大分時間が過ぎていたのだから、鑑戸の下から外を見ると列車は海岸線を走っていた。眠り込んでいたので、どこかさっぱりわからなかった。内陸の東北本線では海が見える訳がないと気がつく。東北出身の佐々木が列車は常磐線を走っていると言う。どこから常磐線に入っただのか、誰も知らなかった。乗換もなし、乗ってれば青森八戸部隊に連れて行かれる、気楽なものだと雑談していた。

指令を受けている鉄道隊員だけがわかっている。大変な勤務だ。浜松を出発してからどこで交代したのか

……。走っては止まりの軍用列車だったが、盛岡と思われる所に停車、弁当が支給されたが下車も出来ず、手足を伸ばす時間もなく走り始めた。誰か鑑戸を開け、オーイ岩手山ではないか……。と。反対側の窓に雪で真っ白な山を見た。この山が岩手山かと私も見る。列車は気のせいか速く走っていた。八戸は近くなったのかと思っていると、尻内と書いてあった駅を過ぎて停車。ごとんとと車両が動く。後に進む。前に向いていた兵隊が浜松に帰るのかと大笑いだった。列車は八戸線に入り走っているとは誰も知らなかった。八戸はどのような町かと鑑戸を開ける。窓の外は小雪が舞い上がっている。鈍行軍用列車に二泊三日岳詰で、身体の節々は苦痛だった。八戸駅に到着しやれやれと伸び上がると、腰は痛いやら体の関節ががくがくした。全員下車、外に出ると風雪で身震いがした。点呼後に外套着用の指示があった。列車内では暖房がしてあった。

雪路を滑りながら行進、町の人は日の丸の小旗を振って歓迎してくれた。部隊まで雪の行軍であった。

八戸部隊に到着し、正門歩哨が捧げ銃、将校が受け私たちを引率して講堂に入った。兵舎に他の兵隊が入っていたので、私たちの中隊は兵舎に入れなかった。講堂と空いている室に分散して入室。寝台もなく、板の間に藁ぶとん、毛布が敷いてあった。三週間くらい不自由な生活だった。

兵舎に入っていた中隊がどこかに出ていった。私たちの中隊が来るので準備していたのか、何のためにいたのかわからなかった。私たちが兵舎に入って、各特技班を編成となった。一般兵から衛兵と炊事勤務兵が付いた。戦隊は部隊にいたので合流し、北方派遣一四六部隊飛行場大隊補給中隊となった。

大型特殊車両が部隊内の引込線に入った。除雪車、牽引車、雪上車、発電器車、旋盤搭載車、質車、兵器機材を自動車班は受領。

ディーゼルエンジンの牽引車は森本班長以下経験者がおらず、トラック二台で牽引してエンジンを掛けたが、回転が上がらず調子が悪かった。隊員は大型のエンジンを初めて見たが、私は、気化器噴射ポンプのと

ころにレバーがあったので動かすとエンジンの回転が早くなったり遅くなったりする。燃料のエア―抜きレバーであった。パイプネットを弛めると軽油の泡が飛んで出てきた。私の作業衣は軽油で汚れた。泡が出なくなるまでレバーを動かした。パイプネットを締めるとエンジンの回転が正常となった。隊員と研究をし、始動前に燃料のエア―抜き、エンジン回転を減圧の位置、熱線で余熱―始動（セルモーター）、エンジン回転が上がるとレバーを庄の位置にとり要領を学んだ。九七式牽引車は性能優秀だった。

除雪車ブー車は列車の除雪車と同じ、右側に補助翼（油圧で上下）を取り付け、滑走路の雪を波にして海上を走るようで、壮観だった。

ロータリー車はブー車が集めた雪を回転翼で遠くに飛ばす。除雪車はガソリンエンジン。運転席に座ると高く、二階にいるようだった。

八戸飛行場の滑走路にて除雪作業をした。頭上で九七式偵機が旋回して翼を振っている。除雪が終わって着陸ができるのにと私たちは思っていた。また旋回し

て翼を振っている。除雪車が邪魔なようなので誘導路に移動させた。司偵機は着陸、操縦者が凄まじい勢いで私たちの小隊長にかかってきた。私たちは何事かと思っていたら、「滑走路をきれいに除雪するな」と怒鳴っていた。飛行機は車輪ではなかった。フロート（下駄）だった。飛行場は広いのだ、雪のある場所に着陸すればよいのに……下駄履機は私たちが除雪する前に離陸していたのだった。

一九七重爆機が車輪が出ず飛行場上空を旋回していたが、雪上に胴体着陸、精励な操縦者がエンジン停止していたので火災はなかった。私は整備班長を乗せ牽引車を運転して重爆機を格納庫内に牽引してきた。

九九双軽機が接触事故を起こし二十人死亡。操縦者のミスであった。

十八年度補充兵が教育隊より転属してきた。補充兵の自動車操縦再教育で、寒期も過ぎ青葉の芽が出てきた頃、五戸、六戸と田舎道を走った。駐道になると補充兵の操縦は脱輪が度々だった。十和田湖町より青葉と若葉トンネルを潜り、奥入瀬溪流の水を飲み、水筒

にも入れる。せせらぎはさらさらと流れている。十和田湖に着く。湖は静かだった。湖水の中にマリモが見えたかどうだったか、休憩所に入るとガラスの箱の中にマリモが入っていたが、兵隊は偽物だと言っていた。

蕪島はウミネコの繁殖地、何百羽のウミネコが鳴く声は独特だった。種差か種市に馬の種付けをするところがあって、私たちは見学に行ったこともあった。種差海岸線を操縦教育して久慈まで行った。

飛行機掩体壕構築の勤労奉仕があり、雨天日以外は、毎日補充兵の自動車操縦教育を兼ねて町の人を送迎した。おばさんが多数で、男性は年配者が数えるくらい。二人が一組でモッコを担ぎ、賑やかでよく働く。コの字型の飛行機掩体壕を構築した。

休憩時間は持参した蒸したカボチャを私たちに御馳走してくれ、栗のような味でほかほかして美味しかった。部隊より勤労者に甘味品が支給されるので、今日は何が出るのか楽しみの方であった。私たちに支給される甘味品が少なくなったことはいうまでもない。

飛行訓練や哨戒機の離着陸を身近で見ても感心していた。毎日の送迎で私たちも顔馴染みになった。

北海道標茶（計根別）派遣隊より八戸部隊に牽引車の要請があり、単独で私は北海道標茶（計根別）に行った。引込線にて牽引車を積載した。私は徒手帯剣の軍装で、同期の多田が八戸駅に送ってくれ、町の人と共に列車に乗った。私一人なので車内の人が見て何と思っているのか……。青森駅に着く。港内のホームは連絡船に連結するレールが敷いてあった。車両は連絡船に乗れるのだ。

青函船内の畳敷の柙席に座っていると、町の人が話をしながら入ってきた。兵隊さん一人ですか、函館まで一緒にしましょうと、リンゴとのり巻を頂いた。北海道のどこに行くのかと話しかけられ、私は札幌だとか適当なことを言うと変な顔をしていた。脱走兵と思われたらしい。

青函連絡船は函館港に着いた。鉄道隊の連絡室に行き、牽引車積載の車両は何時頃になるか聞きにいくと、「時間はわからぬ、このように機材と車両で混雑

しているのだから」と鉄道隊員は駆け回っていた。年配の隊員が五稜郭でも見に行ってきたらと言うので、その気になって駅を出ると、兵隊が分隊で行進をしていた。一人の行動はまずいと思ったが、聞いてきた方向に行くとき若い憲兵に呼び止められた。「どこに行くのか、部隊はどこか」と誰たが何なされたので、飛行隊の記章を見せると私に敬礼して行ったが、今度は下士官を連れて来た。下士官は「重なる言葉と態度だったので部隊の証明書を見せると、「ご苦労さん、一人では何かと疑われるから気をつけて行動するように」と言っ

て帰っていった。憲兵二人も私を脱走兵と思ったようだった。私は鉄道隊の連絡室に帰り年配の隊員に憲兵に疑われたと話をした。「彼らも眼を光らせて勤務しているからな、我々も機材の行き先を間違えたら大変なことになる」と言う。

牽引車を積載した車両が入って来たと報告があったので、私は確認しに行き標茶に何日頃になるか聞くと、それはわからぬ、今度発車する函館本線に乗車するようにと、私に弁当を渡して走って行ってしまっ

た。

函館本線を孤独の旅で標茶に向かった。弁当を食べ、牽引車を積載した車両がこの列車に連結できたらしいのになあと空想をした。列車の揺れで眠り込む。いつの間にか室蘭に着く。北海道の地名はアイヌ語が多くわかりにくい。鉄道隊員に標茶に何時頃に着くのか聞くと「まだまだ先だからわからぬ、寝ていい、近くなったら起こしてやるから」と言われ、気楽になった。帯広に着く。弁当の差し入れがあった。釧路で乗り換えるように言いに来た。私は函館の鉄道隊員から標茶で乗り換えるよう言われたが、「この車両は釧路で切り離す時間がない、標茶に行く列車があるから心配するな……」と。私一人を間違はなく目的地の駅に連れて行く鉄道隊員の勤務に感謝をした。

釧路に到着。鉄道隊員がホームの反対側の列車に乗り換えるように教えに来た。隊員の胸の註記の氏名を見たが忘れてしまった。

釧路の鉄道隊員に指示された列車は根室線なのか、私は気にせず乗車した。川沿いを走って湿原地帯らし

きところを過ぎて行った。孤独の旅も終わりに近づくと思った。標茶駅に着く。

鉄道隊員はいない。駅員に計根別の部隊に牽引車を積載した貨車が何日の何時頃に入ってくるのか聞くと「わからぬ、着いたら部隊に連絡することになっている」と言っていた。

列車は標茶駅を出て走ったが、計根別は近かった。原野に可愛い小さな駅だった。私は二、三人の人と共に下車、私服の駅員に部隊の証明書を見せたが、私の軍装を見ているだけだ。家は駅のところ数えるくらいで、部落の人が私が珍しいのか見ている。部隊兵舎は何処に……建築中と私は聞いて来た。三百メートル先の建築の響きが聞こえる方向に行くと、事務所があるが誰もいない。通り過ぎて行くと誰か私を大声で呼んでいる。「おーい、こっちだ」と一棟の仮小屋だった。角材に戸板を打ち付け、屋根はルーフィング張りでびっくりした。電気はなく、カンテラ火屋の灯り生活だったので驚いた。

派遣隊長中村中尉に申告に行く。「ご苦労、よく来

た。疲れたろう。見てのような飯場生活だ……」と笑っていた。「兵舎は突貫工事で建築している。近いうちに完成するだろうから、仮小屋で我慢してくれ」と。班内に入ると、私の席に衣服、藁ふとん、毛布等、手箱に私の氏名まで整理整頓されていた。雑糞より航空兵操典、典範令を手箱に入れ、私物は棚に置いた。

隊員が作業終わって帰って来た。「おう来たか、計根別は土方だ」、泥だらけの作業衣だった。牽引車は私が担当者だったので「派遣隊に岩本が来る」と班長は言っていた。私は部隊の酒保で調達した甘味品を班長に渡した、列車の中で食べる甘味品だったが。

牽引車積載の貨車が三日も遅れて引込線に入ってきた。エンジンを始動するので燃料パイプのエアークレッキ、バッテリーのターミナル付け、エンジンを掛け貨車から下ろした。荒地（原野）整地と側溝掘りに牽引車は機動力を十分に発揮した。

炊事隊員を乗せて私はトラックを運転して根室の漁村に魚を買い出しに行くと、眼の前の北海道に近い島

が国後島で、沖の方に霞んで見えるのが択捉島だ、あの先に点々と島があると漁師が説明をしてくれた。この島が千島列島かと私は眺めた。

漁師は、今日は海が荒れて漁には出られない、兵隊さんは遠いところから来てくれたのに何もなく気の毒だ、と赤貝を剥き海水で洗って串に刺し、塩を掛けた焼貝を皿に山盛りと昆布も焼いて米飯を御馳走してくれた。美味しかった。こんなものでよるこんで食べてくれるなら毎日来いと言う。佃煮工場を教えてくれたので小女子の佃煮を買って帰隊をする。今度来る時は何か持って来なければと炊事兵と話し合った。

派遣隊員は毎日土方作業であった。休日は二三人組で外出許可されたが、遊びに行くところも見物するところもなかった。広い原野だった。ある日二人の兵隊を連れて牛が鳴いている家に行くと、六頭の牛が草を食べていた。家の人が出て来て私たちを見て、「この牛は乳を搾る牛だ、兵隊さん牛乳飲むか」、と湯飲みに搾った牛乳を持って来た。生温かく生臭かったので私は飲めなかった。「牛乳は公農公社に納める。美

味しい牛乳は公農公社に行けばいくらでも飲めるから一緒に来い」と言うので、私たちは大きな牛乳缶を積んだ馬車の後について行った。大分歩いた。白く塗装した建物が公農公社だった。中に入ると牛乳は検査をして別の器に移された。公社の人が湯飲みで牛乳を飲ませてくれた。甘くて美味しかった。

牛乳はどのような製造工程で加工されたのか、管から降るようにミルクとなって大きな器の中に集まっていた。公農公社に兵隊が行くと、牛乳を飲みミルクを舐め放題だったが、持ち帰ることはできなかった。

補充兵三人が魚を釣りに行くので私は後について行った。釣竿も持たず木銃とカマスを持って行くので、どこに行くのかと思っていたら孵化場だった。柵を越えて入ると、鮭か鱒が重なりあって登って来る。木銃で魚を叩き手掴みでカマスに入れる。監視人は黙認しているの、兵隊は洗濯石鹼や軍手を渡して逃げるようにして帰って来た。

補充兵に漁師がいたので魚料理は上手だった。イクラを食器に入れ醬油で一夜漬けにして、朝食に食べて

くれと米飯の上に掛けたので、生臭いと思いつながら食べてみると美味しかった。酒を入れると味が良くなるのだがと言う。その後本格的なイクラを食べたことは言うまでもない。イクラを見ると計根別で初めて食べた味を思い出す。

一カ所だけの吊り井戸では水の量が少なかった。水を汲みドラム缶に入れて運ぶ。一週間に一、二度ドラム缶風呂に入っていた。井戸を深く掘りポンプで汲み上げればよいと誰もが思っていたが、手が回らなかった。兵舎の建築が終われば何とかするだろう。突貫建築の兵舎は大分進み、徴用の大工さんの慰労を兼ねて、留守番兵を残して派遣隊員と弟子屈温泉に行くことになった。秋季に入って肌冷えがする。

トラック二台の荷台に分乗した隊員と大工さんは毛布を背に掛けて何やら話をしている。運転席の私は隣に乗った隊長に、十日に一度温泉に行けるならドラム缶風呂に入らなくてもよいと話をした。隊長は、今に雪が降り吹き溜まりで雪上車でなければ行けなくなると言う。弟子屈は近かった。木造のさびれた温泉宿に

入る。温泉の量が多いので隊員と大工さんは大喜びで湯を掛け合っている。ドラム缶風呂ではこのようなことはできぬ。温泉で温めた体はよい気分だ。陽のあるうちに帰隊をした。

寒気が身体に感じる頃兵舎が完成。カンテラで薄汚れた顔の私たちはバラック生活から新築の兵舎に移動した。内務班に入ると板敷の室、畳の室で、電気の灯が明るくてまぶしい。窓は防寒用で二重だ。板敷の室の方に机と椅子がある。畳の室は一段高く寝台のようだった。畳の上に藁ふとんを敷く。畳の匂いが何とも言えなかった。板敷の室にダルマストーブがあり、温かく感じた。兵舎が完成し八戸より本隊が移動して来たので、内務班は編成替えをして賑やかになった。

北海道の本格的な寒期が来るので、私たちの自動車班はグリセリンの練状を薄めて不凍液を作り、車両のラジエーターに入れて整備をした。エンジンオイルは耐寒滑油（植物性）に入れ換えた。

零下十度近くになると一時間おきに全車両の暖期運転を実施する。車庫はなく、夜空がしみ透るほど寒かった。

た。

新築の兵舎に入浴場の建物は出来ていたが、水道は引いてはいなかった。一カ所しかない吊り井戸の周りは凍っていて、バケツを下ろすことができなかった。鉄棒で水を砕きバケツで水を汲みドラム缶に入れて、ドラム缶を転がして風呂場に運び浴槽に水を入れ、釜に火を付け、一個班の隊員が入浴するには時間がかかった。入浴を済ませて内務班に帰るまでに手拭いは凍って棒になり、手の上で立つ寒さになった。

内務班の廊下の防火用バケツも薄氷が張って、温かいのは室内のストーブの周りだけだった。素手で金具類に触ると張りつく。炊事に使用する水は、部落の家の中にある井戸水を汲み、ビヤ樽に入れて馬糞で昼中部落の人が運んでいた。

青森八戸と北海道計根別で、寒期中、心身共に鍛練した軍隊生活を過ごした。新築の兵舎に暖かくなるまで落ちつくのかと思っていたら、部隊は移動するよううで何となく多忙になってきた。飛行場と滑走路建設は冬季で作業は進まず、設定隊も来なかったので未完

成に終わった。

昭和十八年十二月、北方派遣部隊は小樽港に集結することとなり、計根別の引込線で車両機材の積載を終わり、私たちは列車で標茶駅を出発。原野を走り、釧路―帯広―狩勝峠を越し北海道を横断、日本海の荒波を眺め小樽港に到着。埠頭は各部隊の機材で山となっていた。私たちも空き地に機材を集積する。車両は町の道路に駐車したが、厳しい寒さは苦にならなかった。

飛行隊の私たちは料亭千代本に宿泊。前々年に宿泊した部隊は上部将校が気難しくて兵隊さんは気の毒だったと、食事を世話してくれた女性（芸者？）が話をしていた。飛行隊の皆さんは将校さんも兵隊さんも明るく安心だと言っていた。私たちは内心、なるようにしかならないと思ひ、態度だけでも明るくしていたのだが。朝食後に車両機材の点検で全車両の暖期運転作業中、無人の牽引車が横滑りしてガラス戸を壊し、真横の民家に入り、柱が支えになって止まった。私たちはびっくり、止めることもできなかった。家の人は奥

にいたので怪我もなく胸をなでおろした。他の牽引車のウインチで引き出し、滑り止めの錨を取り付けたが、六トンの牽引車はキャタピラが横に滑ることを知った。原因は凍っている道路の方が高く、傾斜していたからだ。部隊に報告。民家をすぐに修理。誰も怪我もせずガラス戸で済んだので、十分注意するように隊長に言われた。

夕食後に時々女性（芸者？）が大広間で舞を舞って慰問してくれたが、内地を出て北海道で見納めかと思うと気持ちには複雑だった。

小樽港で日振丸（明治中期建造六千トン）に車両機材を満載し、他の部隊の将兵と共に乗船。老朽船なので不安だ。僚船太平丸は八千トンの新鋭船、船尾から上陸艇が出る。戦友たちもあの船に乗れたらなああと、どうにでもなれと捨て鉢の気持ちだった。

太平丸、日振丸は小樽港を出港。日本海をどの方向に行くのかわからない。私は三人の兵隊を連れ、機材車両の点検に船倉に行った。二段目のタラップを下り船室に行くとき将兵が私たちの行動を見ていた。船倉の

点検異常なし。下の船室は換気が悪く気の毒だった。

上部の蚕棚船室に帰り、時間が大分過ぎて何やら甲板が騒々しい。甲板に行くと眼の前に陸地がどんとあった。津軽半島だった。太平洋海域に米国の潜水艦が出没との情報が入る。輸送船は大湊港に寄港することになり、太平洋には出なかった。

大湊港内で救助訓練をした。体全身にゴム製救命具を着用、頭部は別に被る。口のところに木の栓があり、海に入ったら栓を抜く。胸と背に浮袋がある。足に重りがついて仰向けに寝ていられる。冷たさはさほど感じなかった。

二週間も入浴していなかった。内地で最後であろう入浴に、ハシケに乗り町の銭湯に行った。多数の兵隊が入れ替わり、男湯も女湯もいもを洗うような騒ぎで風呂に入った。飛行隊、歩兵、高射砲隊、通信隊と入浴を終わり、点呼。逃亡する者があるわけでもないだろうに。

ハシケに乗って日振丸のタラップを上る。私たちは甲板の下の船室で、甲板に出入りは自由だった。トイ

レはデッキから海に出た輸送船らしき即製トイレだ。私は甲板で冬の津軽の山、港内の景色を見ていた。漁婦りの船から、「兵隊さんニシンをやるぞ」と漁師が二、三匹投げしてくれたので、船員室に持って行き、塩をつけ天火で焼き、船員と食べた味が忘れられない。戦友と思い出話を語りながら就寝。

起床の声。昨日風呂に入ったのでよく寝られた。うがいをしに水筒を持って甲板に上ると、いつの間にか駆逐艦が二艦港内に入っている。艦名は潮風、白浪だったと記憶していたが……。いよいよ出港かな……。

ある夜、船のエンジン音が高くなり、日振丸と太平洋丸は駆逐艦に護衛されて大湊港出港、津軽海峡を静かに太平洋海域に向かっていった。北海道沖合も遠くになると北海の荒波が高くなってきた。日振丸はローリングが始まり、船内がきしみ、いやな音がする。ギーングググと体に響く。スクリューが空回りをしてガーガンガーガンと、船のローリングで分解するのではないかと戦友と無声で顔を見合った。船酔いで青白い顔の隊員が出て来た。他の部隊が金秘庫衛兵勤

務に就いていたが、船酔いがひどくて勤務ができず、部隊指令により飛行隊にも衛兵に就くように伝達があり、自動車手にも多少の船酔いの隊員がいたが、私たち四人が元気だったので金秘庫衛兵勤務に就くことになった。

甲板に上ると荒天で薄暗く、甲板に波が吹き上がってくるので天幕を張って寒さと波をしのぎ、一時間勤務に就いた。駆逐艦はローリングで波の間に見える。日振丸に近づくと水兵がロープに掴まり私たちに片手を振ってくれ、心強く感じた。ライトで点滅信号を送っていたが、何だかわからなかった。大時化の波間から出てくる駆逐艦を見るとやれやれと安心した。日振丸は潜水艦の攻撃を避けるために蛇行している。船足の速い僚船太平丸は単独航行し、大時化で見えることはできなかった。

勤務交代し船室に入ると、空気が濁って臭く、彼方此方と船酔いの戦友がいた。甲板で勤務していた私たちは船室がこんなに臭いとは思わなかった。小隊長に甲板に出るように話をしたら、時化で危険なので船室

にいるように指示があったそうだ。元気だった私たちに「ご苦労だが車両機材の点検に行ってくれ」と言われた。タラップをおりて行くと、他の部隊（渋谷部隊？）の将兵も船酔いで何とも言えぬ臭気だった。次のタラップを下り車両機材の点検を済ました。

横に大きなドアがあった。鉄の重いドアだ。開けて入ると機関室。蒸気機関を見上げると、大きなピストンが異様な唸りと共に上下していた。電柱のような太いシャフトが床でゴーゴンゴーゴンと回転している。船員が私たちがいるのを見て、危険だ、シャフトに近寄るなど大声で怒鳴る。巻き込まれたらあの世行きだ。この先はスクリーナーかと思うと身震いがした。船の最後部の機関室に入ったのは私たちだけであろう。千島沖合にアメリカ潜水艦出沒の情報を得た。何時攻撃されるか……身体が緊張……救命具を準備する。太平洋海域より北海の大時化と濃霧に助けられてきたが、今度はアメリカ潜水艦が攻撃か……駆逐艦が連れ添うように日振丸を護衛してくれるので心強かった。

得撫島北端の岩見港に無事入港。太平丸は択捉島に

機材を降ろすとかアメリカ潜水艦が出没したとかで寄港したようだ。日振丸船上で私たちの中隊は上陸準備、甲板で待機。港内海上を警戒すると港内の駆逐艦が急発進し、沖に向かっていた。アメリカの潜水艦が出たかな、何だろう、何かあったか……私たちは战友と無声で駆逐艦の発進を眼で追った。中千島南沖合で新鋭船太平丸は潜水艦の攻撃を受けて沈没し、全員戦死したようであるとか、少数の隊員が海に入り凍傷で助かったようだとか、確実な情報を聞くことができなかった。上陸寸前に將兵、機材と最新鋭船を失い、残念でならぬ。駆逐艦が救助に向かっていた時のことが今だに眼に残る。戦死された將兵、船員の冥福を祈る。日振丸の私たちは、第一回目の死線を越した。

市ヶ谷自衛隊内に陸軍航空鎮魂碑が祭つてある。私は平成元年四月十五日祭典に参加した時に、小樽港や得撫島の話をしていて隊員がいたので聞くと、日振丸に乗船していた隊員だった。小樽港で最新鋭船の太平丸に誰でも乗船したがったが、乗船していたらとうに靖国神社に入っていると……。老朽船の日振丸に乗船

したので助かった。運命はわからぬ。得撫島での思い出、シベリア抑留生活の話も、命あつてよかつた。

「生と死」「苦と機運」。

得撫島東雲飛行場では、半地下兵舎前の誘導路上で牽引車のキャタピラ点検中、爆風で飛ばされ横っ腹を打ち、呼吸が苦しくなり、キャタピラに寄り掛かっていた。爆音で奥山中尉が兵舎から出てこられ、「どうしたどうした、どこをやられた……」

艦砲射撃かと思つた。弾薬庫が爆発したと誰も知らず、谷の向こう側から黒煙が立ち上り、薬莢の臭いと銃弾がビュンビュン飛んできた。隊長に助けられ、私は兵舎に入った。原因は火薬の悪戯だ。ちよつこのことが大きな事故になつてしまった。隊員一個班全員死亡、軍服は襤褸ぎれ、手足は四方に飛び散り、悲惨だったと現場に行つた衛生兵の話。私は二度の命拾ひだった。

岩見浜港に海軍の爆弾を運ぶよう自動車班に連絡があった。輸送船から揚陸してあつた爆弾を退避構に運んだのも私たち。梱包箱に入つていた一〇〇キロ爆弾

は二人で案に担ぐ。五〇〇キロは車両荷台よりタイヤを敷いた上に転がし落とした。恐ろしさ知らずだった。

海軍の五〇〇キロ爆弾を見てくれと言う。棺箱の大ききの梱包箱を開け、五、六人で静かにおっかなびっくり取り出した。士官がハンマーで信管を叩く。私たちは地に伏し、士官は気でも狂ったのかと思っていると「脅かして悪かった、爆発したら俺もあの世行きだが、信管はスクリューなので叩いても雷管に届かない」と言われた。

爆弾は船舶隊が機帆船に積み北海道の港に持ち帰り、海軍士官と下士官は機帆船と共に帰ったのか、その後は会うことがなかった。

初夏気候の得撫島は冷たかった。晴天の日だった。九七重爆機が着陸。哨戒飛行で立ち寄ったのか……。燃料も爆弾もない、何事があったのか。私たちは手持ち無沙汰だったので機体の清掃をしていた。地上部隊の金モールをキラキラとつけた参謀と上層将校が集合し飛行場大隊長と何事か話をしていたが、そのうちに

参謀と上層将校は地上部隊の他の将校に何か言って重爆機に搭乗し、北海道か内地に転進、得撫島を離れて行った。地上部隊に上層将校が多数いるとは初めて知った。飛行隊員は輸送機か輸送船で転進する話があったそうだが、南方も沖縄も内地の都市も悲惨なほどやられ、輸送機だの輸送船がないことなど飛行場大隊長は知っていた。得撫島に残留し死守すると言ったと、中隊長より話を聞いた。

自動車班に三八式と九九式の銃があったが、弾はなし。地上部隊と共に白兵戦となるだろう。どうにでもなれの心境だ。九九双軽機が一機、エンジン不調、替える部品なしで飛行不能、退避構にでんとおさまっていた。

車庫の前に薄汚れた弾薬箱が置いてあった。何か利用するので誰か持ってきたのだろう。弾薬箱をよく見ると赤、黄、青のペンキの標がある。これはガス弾ではないかと中隊長に報告に行く。隊長は「来ていたか」と言う。地上部隊が夜中に運搬して来たらしい。隊長は知っていた。

飛行機に搭載する爆弾は知っていたが、毒ガス弾があるとは……。防毒面を携帯し、毒ガスが洩れたら……。爆発しない限り……。隊員は初めて見るのでびくびく車両に積んだ。岩見浜に運搬すると、船舶兵が上陸艇で待っていた。島の北側の沖にガス弾を投げ捨てて来た。青黒い海潮の泡が不気味だった。

八月十五日。飛行場大隊員と独立整備隊員は本部前広場に全員集合、天皇陛下の終戦の言葉聞いた。波の雑音が電波に入り聞きにくく苦労をした。大隊長からの訓示で、「独断で早まったことのないように……今後どのようなことになるかわからないが、その都度指示に従うように」と。軍隊手帳、典範令、書類写真等を焼いた。

将校も兵隊も動揺は隠せなかった。艦砲射撃も空爆もなく果たして船が迎えに来るのか。戦争で死ぬことはなくなった。砲弾が飛んでこない安心感がやっとこみ上げてきた。誰も同じ思いだったろう。

船舶隊員は上陸艇二隻をロープで組み、燃料、食料、水を積み北海道に向かったが、北海の荒波を乗り

切ったかどうか？ ソ連船に捕まったか？ 船舶隊長の指示ではあったが、上陸艇では無理だったのではな
いか……。乗船の隊員数不明であった。

終戦後、ソ連駆逐艦が得無島の沖合に警戒出沒してから三日後に、大型上陸艇で岩見浜にソ連将兵が上陸、機材を揚陸。

私たちは部隊本部に行き、将校と士官をトラックに乗せて港に行った。ソ連将校は早口で話をするがさっぱりわからない。揚陸したソ連の機材をマシン（トラック）で運搬してくれと身振り手振りでの要請だった。私の運転の車に将校と下士官らしき者が乗車、新知島と松輪島で日本軍と戦ったと言っているらしい。銃（マンドリン）ダーダーンと口で私に話をする。この島ではそういうことはしないと。軍服だか作業衣は油だらけで体臭が臭く、火事場泥棒のこの野郎と思っただが、隊長よりどのようなことがあっても絶対手を出さず、ソ連が手を出しても我慢するように言われていた。ソ連兵も手は出さなかった。三、四日、ソ連の使役で車のガソリンがなくなるまでだ。女性の将校と看

護婦が乗車、早口で話をする。ヤボンスキー（日本の兵隊）がやっとわかって、後は何を言っているかさっぱりだった。

武装解除。敗戦とはこのような情けない姿かと戦友と顔を見合わせる。人の命と莫大な財産を使い、戦争は懲り懲りだ。浜松部隊で大東亜戦争が勃発し、伊藤班長が戦争は勝っても負けても大変なことになると言われた言葉を思い出す。身の回りを整理し待機した。

八月末日、小舟で港浜に集合。除雪機を揚陸した港だ。吹雪で命がけの苦勞したことを思い出し、胸がいつぱいになった。毛布、衣服、食料と背負って両手に持てるだけ持ち、体重以上を戦友と運んだ。

武装解除後の車両班の私たちはソ連軍の機材運搬をしていた。休憩をしているところにソ連兵がマンドリン銃（軽機関銃）を肩に掛け、早口のロシア語で何か言っているが、私たちはわからない。日本語で話をしろと言ってもソ連兵に通じるわけがない。

手真似で崖のところに来いと言う。私たちは何をやるのかと思っていた。二百五十メートルくらい先に小

島がある。かもめとオイラン鴨（と私たちは言っていた。嘴が黄、腹が赤、背が黒の小鳩くらいの鳥）繁殖地の小島だ。鳥の糞で岩肌は白く、青森八戸の蕪島（ウミネコ繁殖地）を思い出す。ソ連兵は島に向かってマンドリン銃を発射、オイラン鴨は何百、何千羽という勢いで舞い上がる。青空が一瞬薄暗くなった。私たちの頭上にも群れをなしてきたところをマンドリン銃を連続発射、バタバタと落ちてきた。下手な鉄砲も撃てば当たる。日本兵隊ではこのような射撃はできなかった。銃も弾もなかった。

船舶兵からオイラン鴨の卵をもらったが、あひるの卵くらい大きくて、黄身は真っ赤で気味悪くて誰も食べなかった。

マンドリン銃を持った兵隊が七、八人車庫に来た。早口で何やら言っていた。よく聞くとサケサケと言って飲むまねをしていた。私たちは酒かとやっとなかった。車庫には酒はないとジェスチャーすると、車庫の隅の一升瓶を見つけ、四、五人がラッパ飲みを始めた。瓶の中身はグリセリンを溶かした不凍液。酒では

ないと言って瓶を取ろうとすると、ソ連兵はどう思ったのか回し飲みしている。私たちも濃度を確かめるために舐めたことがあったが、口当たりがよかった。そのうち倒れた兵隊を背負って帰って行った。

後日ソ連将校が車庫に早口で怒鳴りに来たが、ソ連下士官が日本兵は酒ではないと止めたのだと一升瓶の不凍液を持って来て将校に見せ、兵隊が勝手に飲んだのだとの説明を聞き納得し帰った。不凍液を飲んだ兵隊は、急性アルコール中毒で重体と死亡者が出たらしい。私もシベリア抑留中にメーデーでウオツカを飲み目を回した覚えがある。

人員点呼、所属部隊名簿との照合、氏名を呼ばれてソ連輸送船に乗船。各人の持物は飯盒、水筒、雑囊だけだった。

浜に没収された毛布と衣服が山となって、何のことはない、汗だくで浜に運んできただけだ。船のタラップを上がるとソ連兵が並んで待っていた。腕を捕まえられ、軍衣のポケットから万年筆、鉛筆や雑囊の中の

ちり紙まで取られた。食料品は取られなかった。

船倉に下りる時に階段で手を捕まえられ、わけなく時計を取られた。ソ連兵は銃を持っている。争って怪我をしてもつまらぬので船賃と違って諦めた。ソ連兵は「カライドウスコーラダモイ」北海道に帰ると言っているようだ。船は何処に向かっているのかわからなかったが。

樺太大泊に寄港した。船内に閉じ込められ、甲板に出られるのはトイレに行く時だけで、私はトイレに行くふりをして甲板に上がると、船は棧橋から遠いところに停泊しており、荷物を運ぶ人の動きが見える。ハシケが船に物資を運んできた。日本の船舶兵だ。ソ連兵も銃を持って四、五人乗っている。輸送船にハシケが横付けになったが、ソ連兵の監視が厳しく船舶兵に声も掛けられなかった。

輸送船は物資を積み大泊港を出港。私たちはしばらくの間船倉に閉じ込められ、トイレにも行けなかった。北海道の何処の港に何時頃入港するのか……。

トイレの許可がやっと出た。甲板から帰った戦友が

樺太が右側に見えると言う。間宮海峡を北上しているのではないか、北に進んでは変だ、私も確かめたいので甲板に上ると、ソ連兵の監視がいて私に「カーカイドウ」北海道だと……。北海道はこの方だと私は指で示すと変な顔をしていた。ソ連将校が来たのでソ連兵は早口で何やら報告、将校は私に手真似で、船はこの先の港に物資を運んでからヤポンスキーの皆さんを北海道に連れて行く、東京ダモイだと言っているようだった。輸送船に乗船している日本将兵数百人が何かするのではないかと、ソ連将校は神経質になっていたのだろう。言葉が通じぬのでどうしようもなかった。私たちはうまくだまされたのだ。

シベリア沿海州ソフガワニ港に入港した。シベリアの九月初旬は日本の真冬の気候だった。空は曇天の鉛色だ。この港も凍結するのであろう。大きな河口のよるな港だ。栈橋に接岸、森林地帯は枯松林で丘陵地帯は茶褐色の風景だった。

物資機材を下ろしてから日本将兵は帰国すると聞いていたので、下船するとは思っていなかった。船内が

騒々しくなった。ソ連将校の指示があったのか、日本将兵が下船を始めた。

私たちも港に上陸し、点呼後、貨車に乗り何時間か走ったようだった。引込線に入って停車。小窓より外を見るとソ連兵が銃（マンドリン）を持って監視する中を多数が下車、吹雪だった。大きな収容所（コムソモリスク）に入ると先着の日本将兵がいたが、ソ連兵は私たちと話もさせなかった。

強烈な寒さが到来し、私たちは収容所内外の清掃、除雪作業をして二週間くらい過ごした。引込線に貨車が入って来た。日本の将兵が降りてくるのかと見ていたが、空の貨車だった。得撫島の将兵に集合があった、その貨車に乗車。走っては止まりの二日間がかりで、アムール河の支流らしきところで他の隊は降りた。私たちの中隊はまた走っては止まりの貨車で数時間。地名も分からぬ原野に降りた。

小さな家が四棟あり、四人かドイツ兵が居住していたそうだ。私たちは分散して小屋に入る。薄暗く油臭い嫌な感じ。灯油の入った缶に火をつけると、黒煙と

共に明るくなった。二段の板の寝台に落ち着く。昼夜南京虫が攻撃してくる。シベリアの酷寒期を越さねばならぬので、居住する收容所（ラーゲル）を全員で建築に取りかかった。材木は豊富、二人引ノコギリ（ピラ）、斧（タボール）などの道具で伐採、運び出し、寒さを克服。一生懸命建設に励んだ。

ソ連人所長は日本人が器用で良く働くのでびっくりしていた。どのような作業にもノルマがあることを知った。食事の量は少なく、いつも空腹だった。体力のない隊員は栄養失調、怪我しても過酷な重労働に耐えなければならなかった。

收容所が完成してもシベリア原野の地名もわからぬところで越冬した。戦勝国のソ連も物資の不足で困っていたと聞く。食料のことでソ連人（四人）同士の殺人が收容所近くであった。食料を載せたソ連兵監視もいる貨車に飛び乗り、物を盗み、横流ししているのを見たことがあった。

刃物は炊事班だけ。炊事で黒パンを切ってくれたが、食べることが何より楽しみの隊員が、パンが欠け

ているの、小さいの、耳のところがないのとひもじいので文句を言うので、炊事班は大きくても軽く小さくても重かったパンをソ連の給与係より受領したまま班に渡した。班では人員の数に同量にパンを切って、くずまで分配した。ピヤ樽に入ったスープはよくかき回し、順番に分配するときは、寝台の上段下段の隊員は目を光らせた餓鬼であった。私もその一人だった。

作業帰りは何か落ちていないかと下を見て歩く。前列は風を受けるが列の後方では収穫がない。凍ったジャガイモが三、四個落ちていた。足を滑らし蹴り、素早く拾った。外套（シューパー）のポケットに入れ、收容所に持ち帰ってストープの上に置く。ジュージューと溶ける音と臭み。馬糞だった。

私たちが作業に出た後に收容所のソ連人が室内を見回り、隊員の持ち物を調べる。とは言え、枕代わりの雑のうがあるだけだ。私は帯剣で小刀を造り寝台の板の間に隠してあったが、見つかり持って行かれて、刀は一切持てなかった。他の收容所で、ソ連兵監視が横暴だったので隊員と喧嘩になり、ソ連兵隊の銃（マン

ドリン)を取ったので大騒ぎになった。

日本将校が隊員を凍死させた「暁に祈る」事件があった。雪解けの河に丸太の筏で日本兵が逃亡、ソフガワニ港で捕まえられたなど、情報をソ連将校はうまく利用し話をしていた。ソ連人はうそつきで、どこまでが本当なのか、一年以上過ぎてても私たちは真意がつかめなかった。

バム鉄道支線の作業のレール上げ(ボデマイ)とレール修整作業をしていた私たちの班に、ソ連下士官が黒パンとタバコ(マホルカ)を届けに来た。班長(高橋少尉)がどうして我々の班にと聞くと、「ソ連分隊長に良く働く(ハラシヨウラポーター)班なので届けるように言われたので持って来た」そして「スターリンは、シベリア開発五カ年計画であなたたちを三〜五年建設に労働させ、この鉄道が完成すれば早く帰国(ダモイ)させるのではないか、そしてソ連の軍人も帰郷させるのではないか」という。「シベリア勤務はいやだ、故郷に早く帰り家族と生活がしたい。正規の軍人以外のシベリアにいるソ連人はみんな囚人なので

十分気をつけるように」と言って帰っていった。ソ連軍隊の中にも私たちに同情してくれる軍人がいることを知った。

班長は、収容所でソ連人(ナチャニク)に作業指示を受けるので片言のロシア語ができるようになった。私たちは労働と寒さで疲れ、ロシア語を勉強する気もなく、作業後は寝台に倒れ横になった。

シベリアの朝は太陽が昇るのが遅く雪の明かりであった。収容所内に五十センチくらいに切ったレールが下がっている。そのレールを叩くと作業集だ。だれが言い出したのか、地獄の鐘。空気が凍ってきらきらと星が輝くようだった。零下二十度になると作業待機になった。

ソ連人(ナチャニク)は四列縦隊の隊員を数えるのに時間がかかった。隊員は腰に水筒と空の飯盒に一切れの塩漬けの魚で(朝食に昼の分のパンも食べる)レールの点検作業、枕木の上を十キロ歩き、太いボールの重みが肩にずしりと食い込んだ。

五十トンの無蓋車が六〜八両、どこでバラスを積ん

だのか、夜入って来た。測量班が路盤の低い所に目印の棒を立ててある。酷寒の夜間は睡魔で身体がにぶく、顔、鼻の凍傷も気が付かないことがある。凍傷は隊員が雪でこすってやった。車両の側面はバラスの重みで錠が開かず、ハンマーで叩き開ける。バラスの上の隊員は凍結したバラスの塊と一緒に落ちて怪我をしたことがあったので、注意するようになった。酷寒の夜間作業のバラス降ろしは苦しかった。

ある日ソ連の正規上部将校が收容所に来たので何だろうと見ていると、日本将校を全員集合させ、軍刀を没収、私物のトランクを持って他の收容所に連れて行った。班長の高橋少尉は残された。私たち下士官と兵隊は階級章を取り外し、氏名を呼ぶように、技術を身に付けていることは言わぬようにと班長より指示されていた。

どこか地名も解らぬ原野に收容所を建設し、シベリアに入って二回目の酷寒期を越した。路盤も未完成の上レールが敷いてある。貨車でゆられにゆられて来て、よく脱線しなかつたものである。

バム鉄道支線は私たちが路盤もレール修整し完備、今では客車も走り、完成した。山のえぞ松で家を建築、枕木、薪に伐採して山肌が見え明るくなった。

シベリアの夏季は短く、年中冬季と酷寒期のようにだった。栄養失調は隊員全員で、気の緩みで怪我もしたが、凍死者はなかった。シベリアで死んでたまるかと各人思っていた。私も酷寒と栄養失調で何度か倒れ、死んだ方が楽じゃないかと思っていると、戦死した兄に「どうした、しっかりしろ」と励まされてどきっとしたことがある。戦死した兄がどうして私がシベリアにいることを知っているのかと、靈感を体験した。体調はだれでも同じ、気力だと感じた。

收容所長の指示で、中隊員は三―五人と他の收容所に分散して行った。私も二、三人の隊員と貨車に乗り、地名も解らぬ駅で下車。トランクに十八人乗車、半日走って三六〇收容所に入った。

室に入ると、衣服はぼろで、顔、手足の薄汚れた年配者と若者が元気なくベーチカで暖を取っていた。奥地の炭坑から帰国かと思っていたらここに連れて来ら

れ、がっかりだと言う。私も思いは同じだった。

混成班が数個班編成され、一個班隊員と路盤の山石を取るために伐採が終わった山に井戸を掘った。地表は石のように凍っていた。縦横一メートルの穴を深さ二十〜三十メートル掘る。初めの土と石はできるだけ遠くに積む。砂地は凍っていたが楽に掘れ、崩れぬように四方に丸太を立て板を打ち付けた。

岩石があるとバールの先に火花が散り、掘るのに日にちがかかった。穴の四方の回りに土、小石を積んで何気ない顔をして掘ったようにしたが、監督はヤボンスキーヒートリ（うそつき）と見破られた。段々と深くなって、下で掘っている隊員は地熱で暖かくなり、シューバー（外套）を脱ぐが、上では寒くて焚き火に当たる。ロープでバケツを下げ掘った石を上げる。バケツを叩くのが合図で、適当に交代した。

何日目かには三カ所に二十メートルくらい掘り終わった。気になっていたが、下にいる隊員は崩れたら生き埋めになる所だった。幸い事故はなかった。五十〜百メートル隊員を避難させ、ソ連人が三カ所にカー

リットと導火線を仕掛け爆発させ、路盤に使用する山石を採石をした。

薪伐採をしようにも収容所近辺は木材がなかった。

段々と遠く、膝まで積雪の雑木林に入って行った。手頃な材木を伐採、枝を落とし担ぎ出す。隊員は気力がなく、丸太を四人で担ぎ、やっと歩いた。一人が雪に足を取られ四人とも転がり、丸太の下になった者は怪我をした。

二人で担ぐ大きさに切って運び出したが、ノルマは最低だった。収容所に帰ったが、私は監督官に呼ばれた。何だろう、ノルマができずサポタージュと思われたかなと、班長でもないのに監督官の所へ行った。薪の伐採かと思っていたが、「あなたは自動車運転ができますね（ハラシヨウシヨール）」と通訳が話をする。中隊の班長高橋少尉が特技を持っていることば言うなと言っていたが、私は昨日の薪伐採の小言かとはかり思っていたので、自動車運転ができると返事をしてしまった。

自動車班に行くと、顔は薄汚れていたが輜重隊の元

気な者で安心をした。五地区より路盤築の車両運転労働で、ノルマは一〇〇パーセント以上で、黒パンは三百五十グラムと増食も食べ、給料も支給されているそうだ。「働かざる者食うべからず」のソ連、私に黒パン、砂糖、マホルカ（煙草）をくれた。このようなことだったら自動車運転ができることを早く言えばよかったと思つた。

車両は米軍スチュードベーカー十輪車、荷台はソ連製。真ん中が高く、横左右に開く前後の止め金具を同時に外さないと滑って開かない。原始的な造りだ。車両を運転し採石場（カリエール）に行き、前車の要領を見た。蒸気機関のシヨベルの運転手はソ連人、助手は薪焚きの日本の隊員。蒸気機関は薪と水を大変な量使用していた。蒸気が上がらぬと、ソ連人は助手の隊員にビストラビストラ（早く）ととげとげしく大声で怒鳴る。

ソ連人の車両運転手も三、四人いる。稼ぐ（ノルマ）時はこの時とよく働く。昼と夜勤交代があった。私が夜勤の時に、ソ連の運転手が寒くて馴れないので

大変だろうと思つたのかコンビーフ入りの温かいごつてりとしたスープを持って来てくれ、他のヤボンスキーに言うなと指を口にしていた。路盤にもバラス降ろしの隊員が空腹でいる、美味しい匂いもするので路盤より離れた場所に行き食べたが、非常に嬉しかった。人情の温かい人がどうして凶人なのかと思つた。

この地区の運転労働、路盤作業を終了し、次の地区に移動。一三八〜一四〇収容所と移動を重ねた。収容所の食事は大分よくなって、砂糖、タバコが少々支給されるようになった。イクラの乾燥した粒だの松葉汁だのを飲む。ノルマをパーセント以上に遂行した作業班の隊員に僅かだが給料（ルーブル）が支給された。自動車班全員七十〜九十ルーブル支給された。ソ連の運転手がよく働きノルマを遂行していたことを思い出す。私は不思議に思う、いつごろの計算を今になって支給するのか。

ソ連人運転のトラックに乗り丸太敷き原野の道路を走った。着いた所のハバロフスク地方四一一収容所に隊員と移動した。明けても暮れてもバム鉄道本線か支

線の路盤築作業。枕木も運ばれ、生木で重く太く、大きな枕木だった。二人で担ぎ敷いて行く。段々と遠くなって背中が痛く、隊員は疲れてきたたてであった。路盤下左右の側溝掘りも終了。ソ連監督は、この先はドイツ兵の収容所で、ヤポンスキーは行くことはできぬと言っていた。四一一収容所で、日本人の最終の所まで来たようだった。シベリアに抑留されて月日など数えたことはなかったが、三年もシベリアにいると気が付く。「シベリアボケ」だった。

幌付きトラックがエンジン音高く四台収容所に入っていた。監督と私たちはそれを見ていた。監督は大声でラポーターカンチャイ（作業終り）と叫んだ。私たちは収容所に帰った。ソ連人の運転手は「ヤポンスキーダモイダモイ」と言っていた。隊員はだれも信用しなかったが、もしかしたらと思う気もした。氏名を呼ばれ、私はどきっとしてトラックに乗車。どこに移動か、三時間くらい走り、駅らしき所に貨車が停まっていた。貨車に乗り替え、だれかがダモイではと言う。車内は蚕棚で毛布が敷いてあった。車内で、ナホ

トカ行きではないか、本当のダモイだと言い出した。

私たちが築いた路盤の線路を貨車が走っては止まりの三日間は寒かったが、身体を寄せあい毛布を掛け寒さをしのいで、支給された黒パンを食べながら過ぎしことを想い起こした。酷寒と労働で食事も少なく、ひもじく栄養失調で、眼は回り身体はふらつき、命があっただけだった。戦死した兄にしっかりと励まされはっとしたあの時は、私は兄の声だけを聞く霊感を信じた。シベリアも暖期には白樺の樹水取り、あの味は忘れられない。無気力で個人主義、心の動揺、凍った馬糞をじゃがいもと思って拾って来た、シベリアで死んでたまると、強く生きなければ帰国できぬ、数え知れぬことが走馬灯のように想いが回っていた。

赤十字葉書を四、五通、母と姉に元気でいる（？）と便りを出したが、返事は一通も手にしたことはなかった。空き缶の灯油の明かりは黒煙が上り、室内は暗く寒く、ペンを持つ指は感覚がにぶかった。ストーブで暖を取ると日中の作業疲れで眠く、葉書を書くのに骨が折れた。その葉書が今手許にある。どこの収容所

にいた時か思い出せないが。

貨車はシベリア鉄道本線を走っているようだ。小窓から鉛色の空が見える。貨車の屋根からつららが下がっていた。気温は零下二十度くらいか、車内で私はぞくぞくと寒気がして、どうしようもなくいやな気持ちだった。貨車は前に後ろに動いていたが、止まった。ドアが開けられ、外は吹雪で薄暗く感じ、頭ががらがんする。下車、友の腕に助けられ、山型のアーチの門を潜り大きな収容所に入ると、室内から電気の明かりが見えて、それがとても珍しかった。

そこはライイチハ収容所であった。隊員の拍手で迎えられたが、私と二、三の隊員は発熱で震え、寒くてふらつき、迎える隊員に介抱され病室に行った。衛生兵から菓を飲まされ寝台に寝かされた。肺炎になる一歩前だった。下着も取り替え白衣を着て休養をする。菓が効いたので助かった。貨車内だったら手遅れだったろう。二週間の休養と、上げ膳下げ膳の甲斐があつて回復した。

オカ（三級）班に入り衣服補修と洗濯作業。ミシン

はあつたが針が無く、ピアノ線を切つてローソクの火でなまし、釘で針穴を開け、先を尖らせ、レンガを砥石がわりにして磨き仕上げる。糸溝はなかったので糸がよく切れた。私がミシンを使用しているのをマダムと看護婦が見て「オーチンハラショー（大変よろしい）」と言つて、白バンと巻煙草を持つて来てくれた。何かたのみごとがあるなと思つた。

収容所浴室（バーニア）の写真がシベリアの写真集に出していたが、私がいる時はあのような設備はできていなかった。洗面器に二杯の湯で頭から足まで洗う。湯船はない。サウナはあるので、ソ連人の男性、女性が入りに来た。

収容所から二百メートル先の民家の清掃に行った（三級者の作業）。一戸建三間の家だった。日本の隊員が建築。私と隊員で床を清掃し、昼頃には終わった。あとは壁の汚れた所を塗るくらいだ。収容所に石灰石を取りに行つて来るとマダムに言うと、この次でよい、椅子に掛け（サジエス）休めと言う。話し好きのマダムで、ご主人は昔の戦争で戦死をし、以前はモス

クワ近郊に住んでいたそうだ。娘夫婦も働きに行っている。

ライチハにどうして住むのかと聞くと黙っていたが、「日本の兵隊（ヤボンスキー）は寒いシベリアに連れてこられて気の毒だ、ライチハに来たヤボンスキーは暖くなると皆ダモイしていった、暖くなるまで待つがよい、スターリンはひどいやつだ」と言っていた。スターリンを憎んでいるようだった。

日本人臆病のマダム、家の中で何やら美味しそうな匂い。皿に山盛りの料理と白パン、ピロシキを持って来て、私たちに食べるという。民家で初めてだったのであちよつとためらったが、ご馳走になった。

学校から三年生くらいの子が帰って来た。私たちにこんにちは（ズラーズチ）と挨拶をし、日本語を教えると言う。私はロシア語が解らない。ズラーズチ（今日は）、ドスピダーニヤ（さようなら）、アジン（一）、ドワ（二）、トリ（三）、チテリ（四）と女の子は数は言える。日本人のだれかに教えられている。他のことを教えると……私の方がロシア語を教えられ

た。マダムにご馳走になった礼を言って収容所に帰ったが、この次清掃に行く時は石灰石を忘れずに持って行くことにした。

家の建築が完成するので、左官班の作業は多忙だった。私は体調が回復、オカ三級班より出ることができ、左官班に入った。本職の隊員の鍍の手捌き、定規の使用法を見てソ連人は驚いていた。ソ連人はモルタルを団子にして打ちつけて鍍で擦り付けるので平らにならなかった。私は二、三日過ぎて下地作業をやらされ、できるようにになった。作業はノルマ以上できて、明日の準備までやる。

身体に余裕ができた。作業パーセントはノルマ以上でソ連監督は喜んでいた。収容所に帰り、風呂（バーニア）、サウナに浴し、浴室を出て洗濯してある下着を着た時は感無量。食堂に行き、演芸班のボルガの舟歌、カチューシャの演奏を聞きながら食事。作業パーセントが良いので黒パンは大きく増食も付いて来る。無気力で言葉も言えなかった頃と天と地の差だった。

千島よりシベリアに来て、原隊の戦友とも別れ別れ

になって、どこの収容所にいるのか、帰国しているかもしれないぬ。ライチハ収容所は給与も良く、体力を回復し帰国して行くと、清掃に行った時民家のマダムが言っていたが……。

黄緑の樹木が見える季節頃、平塚運動が盛り上がり、スタハーノフ運動に追いつき追いこせと青年行動隊が結成された。左官班は行動隊員とともに機を飛ばし、「赤旗の歌」を歌い、作業に門を出て行った……。

日和見的な言葉を言うのと反動とみなされ、やじられる。ライチハ収容所がシベリア最後になるか、この収容所にいた時は共産主義を盛り上げなければならなかった。ソ連政治部員が隊員のアクチーブに指示していたのだ。左官班ばかりではなく、他の班員も生きることを誇りに皆力を合わせ作業に頑張り、帰国を待った。帰国の日はまだか、その日が来るのを隊員はまだかまだかと、口には出さぬが、気持ちちは皆同じだった。

抑留中の労働作業としては、伐採（建築用、薪）、鉄道枕木の製材、線路工夫、山井戸掘り（ハッパ用）、

石割、路盤作り、側溝掘り、測量、橋梁（セメント）、屋根木葉張り、左官、大工、ダンプ・トラック運転手、地球の皮剥（雑木伐採、地ならし）、衣服修理（ミシン掛け）、洗濯屋、野園（ジャガイモ、トマト）、パン工場（黒パン、白パン、ピロシキ）などで働くことであった。

昭和二十四年夏季、ライチハ収容所にて帰国の日が決まった。隊員全員喜びの笑顔。名簿氏名を確認、貨車に乗車、本当の帰国貨車だ。路盤も枕木も橋梁も、皆隊員の血と涙、人柱で築いたのだ。貨車はレールの上を走る。バム鉄道は私たちが建設したのだ、数知れぬ帰らぬ同胞が眠っている。私たちは冥福を祈りナホトカに向かった。

車内に毛布を敷き、缶詰数日間の生活。走っては止まる貨車だ。見知らぬ隊員同士が雑談を始めた。「日本新聞で見たのだが、敗戦の日本本土の都市は全滅し、瓦礫の山で悲惨のようだ。日本に迎えるの船がなく、いつ帰国するか解らぬ」と言う。聞いていた隊員は警戒し、ソ連の回し者かと話もしくなくなった。ナホ

トカ港に貨車は着き、収容所に入ったが、日本人同士の隊員が言葉を牽制し、アクチーブらしき隊員が眼を光らせていた。憲兵、警察、情報隊員を奥地の収容所に戻したのは何であったのか、私たちはアクチーブの行動、言葉に注意するようになった。

収容所内の清掃を一週間くらいやっていたが、息がつまり、肩凝りがする。ソ連兵連転のトラックで私たちの班はナホトカ港を見下ろす丘に道路補修作業に行くようになった。道路の清掃は、収容所内にいるより気楽だ。一週間くらい毎日トラックが迎えに来て、作業にノルマがあるわけでなし、ソ連兵も適当なもので、作業は私たちにまかせていた。

港内に船が入って来た。船尾に日の丸の旗を見る。ソ連兵は「ヤボンスキーラボーターカンチャイダモイダモイ」と叫ぶ。今までにどのくらい聞き、騙されたことか。日本の船を現実に見、今度こそ本当のダモイとトラックに乗車。慌ててスコップを忘れ隊員が取りに行く。荷台の隊員の笑い声、笑顔が晴れ晴れしかった。

ナホトカ収容所に帰るとすぐに全員集合、点呼があり、身体だけで持ち物は何もなし、身体検査があるではなし空身だ。隊員の気持ち、私もだが、とうに日本に帰っていた。

ナホトカ港の棧橋には船尾に日の丸の旗をつけた「英彦丸」が横付けしており、船上で船員が手を振っていた。収容所長が一人一人の氏名を呼ぶ。船のトラックを駆け足で上る隊員も……。私も呼ばれトラックを一步一步踏みしめて上る。足は軽かった。

四年九カ月と長かったシベリア抑留生活も今日終わった。ナホトカ収容所の一日が短く感じた。私は二度と来る所でないシベリアのナホトカ港を船から見た。棧橋に眼が行くとソ連人が手を振っていた。私は思わず「ドスピダーニヤ」と叫んだ。船上で誰か隊員が「馬鹿野郎」の大声。シベリアに憂き晴らしを打ちつけ叫んだのだらう。過ぎし年月を私は思い出し、昭和十六年三月一日浜松九七部隊に入隊以来、戦争で何度か死線を越し、シベリア強制労働抑留生活に苦難を堪え忍んで、生あって帰国することができ、万感の思い

で胸がいっぱいになった。

復員兵を乗せ終わった英彦丸は静かにナホトカ港を出港。祖国日本に、日本海の荒海に向かった。

船内の隊員は誰しも帰国の思いで静かだったが、船が沖に進んだところで、隊員がシベリアでの憎しみが込み上がったのか、爆発して吊るし上げが始まった。

「お前なんかソ連のスパイだ、シベリアに残れ」「日本に帰すな、海に落としてやれ」、激しい罵声が飛ぶ。吊るし上げられた隊員はただうなだれて何も言わなかった。数知れぬ悲惨と苦難を堪え生き延びて帰国できるのだ、ほどほどにすればよいではないか、誰でも叩けば埃が出る。

船内のスピーカーより船長の挨拶があつて、内地の状況説明。「日本には船がないなど皆様は聞いたかもしれませんが、このように船はあり、ソ連が受け入れなかつたのです。永い間御苦勞様でした、船は若狭の舞鶴港に向かつております」と報告があつた。

私たちは「シベリアポケ」で時間が解らず、何時間過ぎたのか知ろうとも思わず、ただただ帰国のことで

いっぱいだった。甲板に上ると前方左右に緑の陸地が見える。日本だ、内地だと感慨無量、涙が出てきてどうしようもなかった。見知らぬ隊員と万歳の歓声をあげる。天の橋立が見える。

船足が落ちて港内に入ると、マストだけを海上に出して船が沈没している。戦争の犠牲になったのか。英彦丸は停船し、ハシケが迎えに来た。ハシケに乗って栈橋に着き、舞鶴港に上陸、内地に第一歩を心強く踏んだ。身も心もすがすがしく、列の友も涙ぐみ胸が高鳴った。日本上陸の暁はと檄を飛ばした隊員はどこに、スクラム組む者もなし。復員局の誘導で建物に入った。氏名と名簿の確認、病氣、怪我の有無、消毒D Tを体に、入浴室に落ち着いた。

母に無事帰国の便りを出す。昭和二十四年九月二十日、舞鶴に復員。

平成三年三月一日、京都にて酒匂会戦友会に参加。翌日舞鶴港に行った。引揚記念館の立派な建物が建築されて、毎日見学の人が多数来ていた。私が記し

たシベリア抑留労働生活の本が展示され、館内に資料が多く、復員船英彦丸の写真等、何を見ても思い出ばかり。二、三度館内を歩き回った。帰国第一歩を踏んだ棧橋は復元され、舞鶴港を見下ろす見晴らし台もできていた。

バイカル湖畔にて

神奈川県 及川勝郎

私は、十八歳で特別幹部候補生の第一期生として志願しました。この頃は戦争一色で、出征兵士を送る毎日でした。隣の家も、また次の家でも愛国婦人会の人々が旗を持って駅で見送るのでした。兵隊に行かないと何となく肩身の狭い思いでした。浜松の飛行隊に入隊して三カ月の教育を受けて、満州に転属となりました。戦争の悲惨さも知らず、ただ「君に忠、親に孝」のみでした。満州に行っても、関東軍百万といわれた兵隊も半分以上は南方に行き、また私の勤務であ

る飛行機もほとんどなく、地上勤務となり国境警備の毎日でした。

二十年八月十五日の終戦となるや、ソ連軍は怒涛の如く侵入し、何の交戦もなく武装解除となりました。ソ連国はこの頃、ドイツに散々と苦しめられたため物資や食料はひどく不足していたので、私達はもちろん、民間の人々からもありとあらゆる物、扇子、箸までも略奪していきました。部隊の近くにいた満州開拓団の人々は我々以上に不安の日々でした。ソ連兵による物資の略奪や婦女暴行事件という悲しい毎日であり、そのために女の人は坊主頭にして昼間は身を隠し、夜になって日本に帰る行動をとっていました。大変な苦勞をして日本に帰ったと後になって知りました。

ところで、私達は何一つ持たず貨車に乗せられました。この貨車は改造され、上中下の三段式となっていて、立つことができないので横になっているだけでした。「行く先は日本」と言って、多くの兵隊さんに乗せて北に向かって動き出しました。ソ連軍の命令で各駅停車でしたので、その度毎に貨車より降りて、身体